

2024 年度

大学生の力を活用した集落復興支援事業 報告書

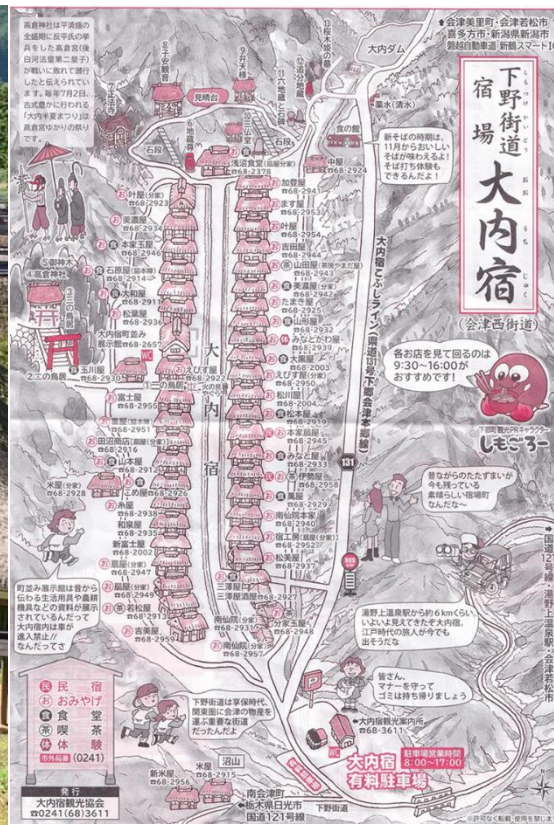
「大内の風景を守りたい」プロジェクト

千葉大学 地域計画学 齋藤研究室

目次

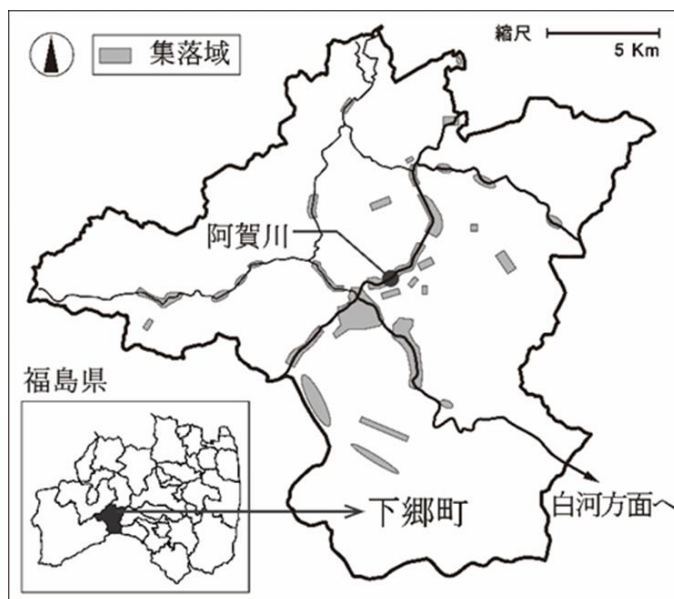
- 1.大内宿の概要
- 2.地域づくりと実証活動の内容
- 3.実証活動に付帯する調査
- 4.今後の展望

1.大内宿の概要と課題

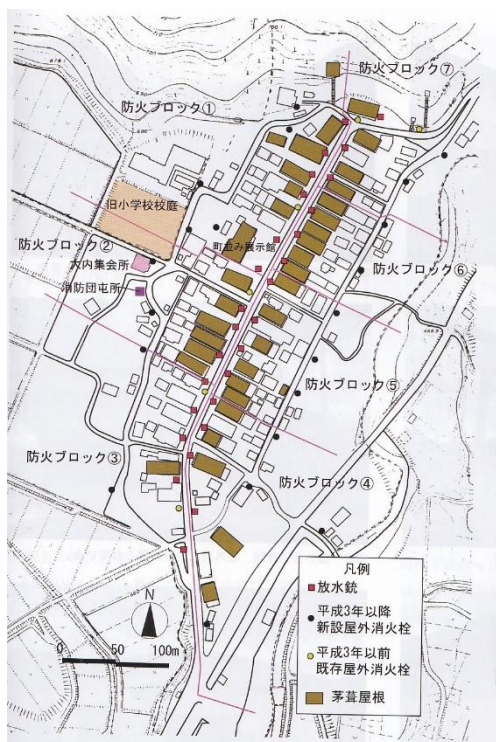


大内地区の遠景

大内地区の観光案内地図



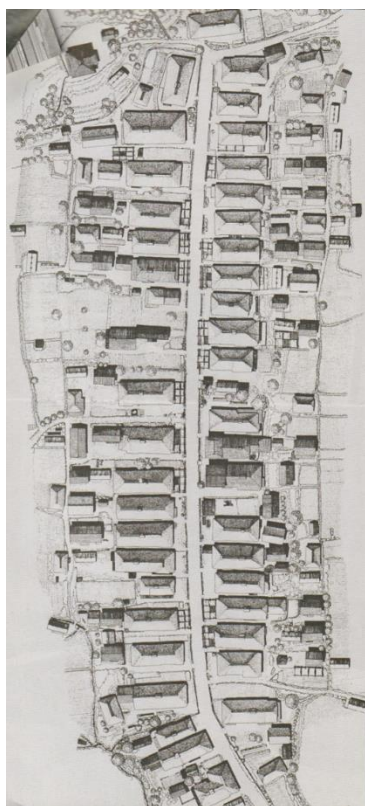
大内地区の位置



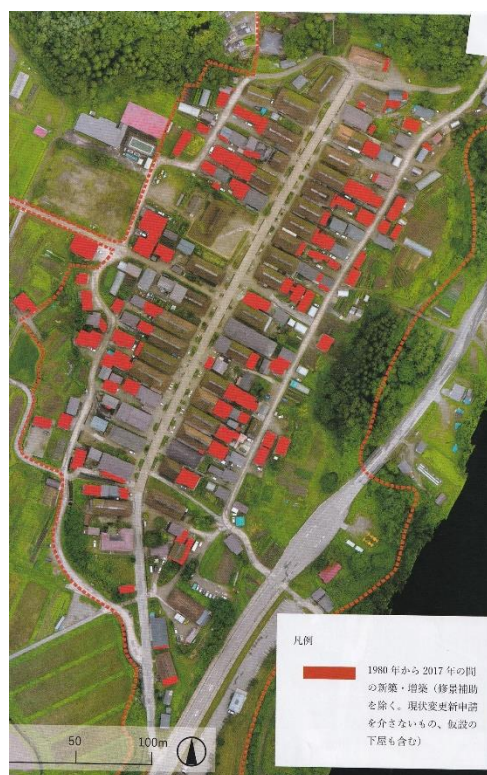
資料1 茅葺民家の位置図



資料2 指定物件位置図



資料3 1960年代の屋根伏せ図



資料4 現状変更の実績

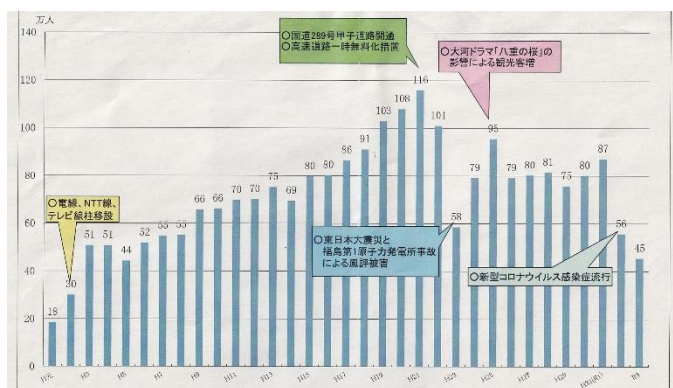


資料5 建物用途図



図4-10 集落周辺の農地山林に関する取り組みと課題（「北大ドローン撮影+Pix4d 雲集」 画像をベースに作成）

資料6 農林地景観の状況



資料7 近年の観光客数の推移（下郷町資料）

大内地区は福島県でも有数の観光地であり、文化庁の重要伝統的建造物群保存地区にも指定されている。資料1－6は、伝建報告書（北海道大学編）より抜粋したものである。観光地としての商業的成功は伝建地区の中でも特筆す

べきものであり、空き家や建物老朽化という点では、まだ課題が顕在化していない。指定物件や修復物件の重大な現状変更の違反も他地域に比べて軽微である。しかしながら、後背農地の粗放化が目立つようになってきた。商業に注力するあまり、農業・農地管理に対する関心と余力がなくなってきたことが課題である。

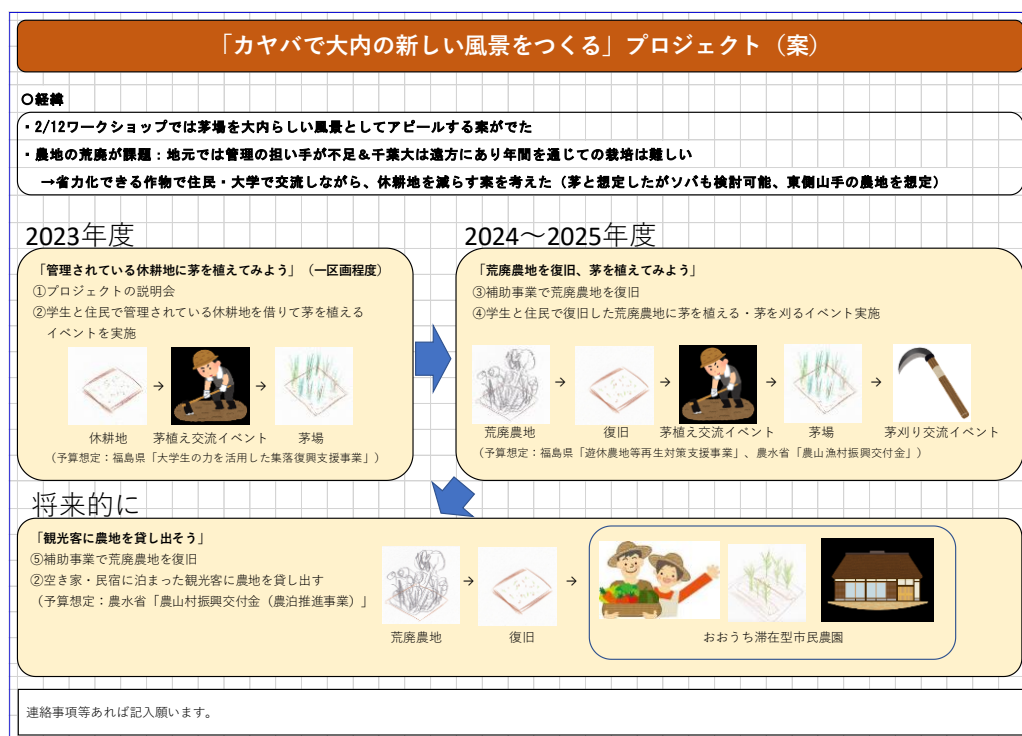
2. 地域づくりと実証活動の内容

1) 前年度までの経緯

2021年度から齋藤教授は下郷町で空き家調査、転出者調査を町と協力して行っていた。そこで、2022年7月に、長野県東御市海野宿のまちづくりに関わる齋藤教授が東御市職員を大内宿に視察として引率し、大内の住民と懇意になったことが契機である。2022年9月にはゼミ合宿を開催し、学生からみた大内宿の魅力・課題に関するワークショップを行い、住民や役場職員に発表を行った。その結果、農地の荒廃が課題であることが明らかになった。2022年11月には研究室有志で第一回目の農地調査を敢行した。さらに、2023年2月には地域の方向性に関するワークショップを住民と共にに行った。2023年5月には農地再生の提案を研究室から地区住民に行い、地元青年会がカウンターパートとなり協働で農地再生を進めていくことにした。2023年7月には茅場の整備と

ソバの種まきを学生と地元青年会で行い、さらに農地調査の2回目を行った。

2023年10月にはソバの収穫と唐箕をつかった選別作業、そば打ち体験、交流会を行った。



茅場再生計画の概要

上記の計画を基礎としながら以下を進める

①農地の再生を目標に活動する

（活動しながら農地を持続する仕組みについて考えていく）

②農地再生から徐々に子供の居場所づくりや観光にもつなげたい

2023年2月住民とのワークショップによる2024年度からの方向性

2) 2024 年度の活動



上左：茅場の再生



上右：子ども里山探検

中：子ども里山探検の
成果作成



下：集落茅刈りの参加



3.実証活動に付帯する調査

4.2 タイプごとの地図分析

→立地の条件が悪いところに
保全管理型の農地が立地



農地調査分析の抜粋

農地調査のまとめ：

①大規模耕作 1/4,小規模耕作が 2 割,保全管理が 1/4,委託が 3 割

=積極的に農業を行う世帯は 1/4⇒全体の休耕地率が 36%

②委託について

- ・ 外から農業法人が入り部分的に管理委託
- ・ 現在は個人（若手女性）が窓口

⇒集落内での意思疎通に課題（集落のやり方 v s 現代的やり方？）

（賛同者が限定的） 一方、委託型は「委託してもらいやすい条件」を持つ

⇒委託の限界性も

③保全管理型は条件の悪い場所が多い

④リンドウ、菜の花など商品作物導入・景観形成

⇒儲からない≪店の経営が良い

⑤農地が伝建地区外⇒農地にも文化財意識必要では？

⑥休耕地の増大⇒中山間・下郷町内では一般的

茅場の存在（特に条件不利地に存在）が休耕地の増大の歯止め

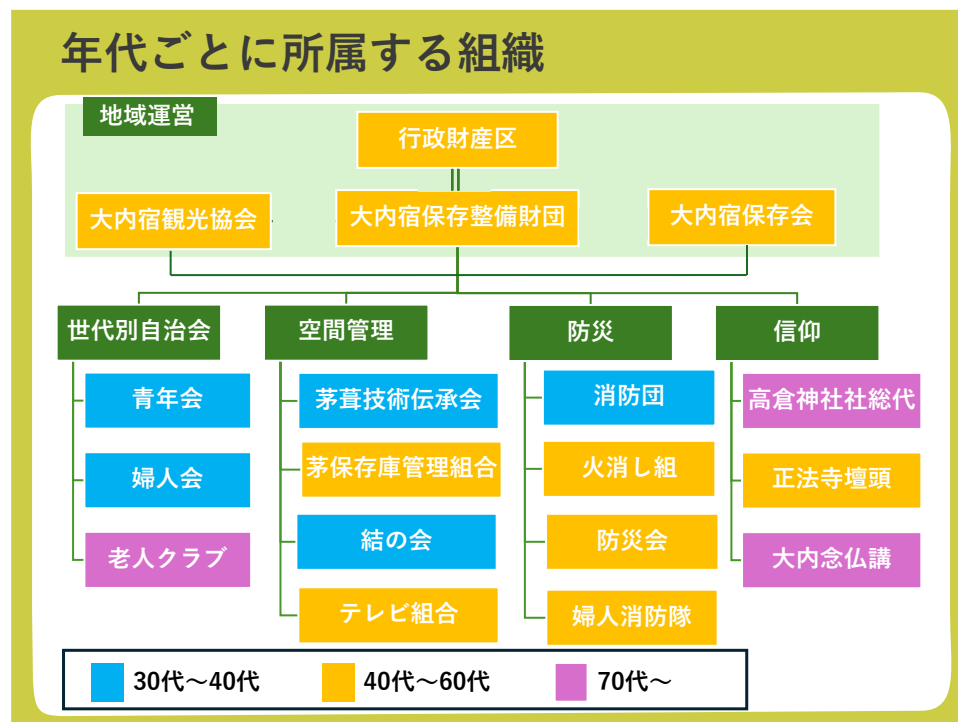
⇒休耕地活用のカギに？⇒茅 3 割弱の自給率向上（研究室プロジェクト）

提言：

①委託管理を地区として考える

- ②財団（組織）などで管理（大内産そば粉⇒各店に）
- ③大規模耕作タイプに、条件の良い農地を貸す仕組み
- ④売れそうな作物か手間のかからない景観作物
（菊・ひまわり？）を植える
- ⑤東側の大区画農地を優先的に再生する

地域組織調査のまとめ



地域組織調査分析の抜粋

①組織数

伝統的な組織が多く残り、個人への負担が多い活動内容

②全体マネジメントの不全

保存と活用を統合的に統括・マネジメントする組織が不在

③世代間継承

世代数の不均衡が負担平等や継承の障害となりうる

④農村の共同性評価

農村的価値観と都市的価値観が個人内、世代間で併存→様々な葛藤や矛盾

生業の多様化と独立性の高まりで農村の結びつきが低下

⑤外部への開放性

よそ者は受け入れないと持続しないとの認識は広まりつつ

あるが、現状は動かず。

外部への開放性は多様化しているため、柔軟な運用も可能

提言：

① 組織の統廃合

② 財団が保存会と観光協会の上位組織として調整・指示機能を持つ

③外部（大学等）との交流等を進めて地域の開放性を高めていく

4.今後の展望

2025年2月22-23日には、上記の調査報告会を開催し、その後次年度の活

動計画検討会を行った。



活動報告会の様子

活動報告会については、農地の活用と地域組織の改編がテーマであったが、地元からは、内部では声が挙げにくいデリケートな課題を学生目線で第三者の意見として見える化したことに評価の声が多数上がった。これを受けて青年会から区的首脳部に直接、具体的提案をしていくことが確認された。例えば区長の持ち回り制から選挙制への移行などの提案である。

次年度の活動計画について簡単にまとめると、

- ① 茅場の再生を継続して行う
- ② 既存の茅場を刈り取り、子どもたちが遊べる迷路づくりをする
- ③ 茅場の再生、茅の迷路づくりから派生した地域活性化に資するプロジェクトを4月以降に考えていくこととした(例.茅場活動を支える外部人材宿泊のための空き家活用など)

なお、活動資金としては、県のサポート事業への応募を行う、もしくは大内地区予算、大学予算を活用して自前で行っていくかをプロジェクトの内容により検討していくこととした。

最後に、大内地区の皆様方、青年会の皆様方、下郷町役場の皆様方には、千葉大学とのご縁を頂き、また活動へのご協力とご理解を頂き感謝申し上げます。

また県地域振興課、(株)社会システムの皆様にも本事業についてご指導、ご協力頂き感謝申し上げます。

千葉県松戸市松戸 648

千葉大学 園芸学部

地域計画学研究室

047-308-8971